

東京文化会館 Music Program TOKYO
Workshop Workshop! コンビビアル・プロジェクト

公開レクチャー&ディスカッション第4回
「音楽とクリエイティブ・エイジング
ーマンチェスター・カメラータとの協働をふりかえって」

【収録日】 2022 年 11 月 29 日（火） 17:30～21:30

1. イントロダクション	2
1-1. 主催挨拶、情報保障の説明	2
1-2. 東京文化会館、自主事業の紹介	2
1-3. 東京文化会館コンビビアル・プロジェクトの紹介	3
1-4. なぜ「クリエイティブ・エイジング」なのか	5
1-5. 登壇者の紹介、今日の構成	6
2. 基調講演「クリエイティブ・エイジング」 日下菜穂子	6
3. 実施報告ー2022 年 8 月～11 月 大阪、東京、オンライン	14
4. オープン・ディスカッションー協働をふりかえって	14
4-1. ヘレナ、アミーナ、ナオミ：3 カ月間の日本での経験をふりかえって	15
4-2. アミーナ、ナオミ：「ミュージック・イン・マインド」の実践で大切にしていること	17
4-3. 小川：オーケストラ奏者からみた「ミュージック・イン・マインド」の魅力	18
4-4. 小川：「ミュージック・イン・マインド」が音楽家に与えてくれるもの	20
4-5. 名倉：オリーブの園における事例、音楽療法の現状	21
4-6. 名倉：創造的な音楽ワークショップがもたらした変化	23
4-7. 名倉：心の自由を届ける	26
4-8. 川野：千代田区社会福祉協議会がアート活動を積極的に取り入れる理由	27
4-9. 川野：社会福祉の現場とアート団体が連携する意義、効果、手ごたえ	30
4-10. 柿塚：継続してきたからこそ生まれた活動と人材の豊かさ	31
4-11. 柿塚：持続可能な活動にしていくために	33
4-12. ヘレナ、ナオミ、アミーナ：連携のその先ー共感を呼ぶアート・フォームへ	35
4-13. 日下：対面の強みを、そして、より多くの人が関われる仕組みを引き出す	38
5. クロージング	39

(敬称略)

1. イントロダクション

1-1. 主催挨拶、情報保障の説明

杉山:

皆さん、こんにちは。本日は、東京文化会館コンビニアル・プロジェクト、公開レクチャー&ディスカッション第4回「音楽とクリエイティブ・エイジング マンチェスター・カメラータとの協働をふりかえって」をご視聴くださり、誠にありがとうございます。

私は、東京文化会館事業系の杉山幸代(すぎやま・ゆきよ)です。私の髪の毛は黒色で、肩につくぐらいの長さです。眼鏡をかけています。今日は白いブラウスに薄いピンク色のジャケットを着ています。日本語で話します。

さて、今日は東京、大阪、マンチェスターを繋いで収録をしています。皆さんがご覧くださっているこの映像は、事前に収録されたものです。

ご視聴いただくにあたり、同時通訳や情報保障のご説明をいたします。

この映像は日本語音声版、もしくは英語音声版のいずれかになります。手話通訳は日本語の手話のみで、日本語音声版に入っています。文字による情報保障をご希望の方は、日本語と英語、それぞれの音声の文字起こし原稿をご用意していますので、この映像の概要欄にあるURLからアクセスしてください。

1-2. 東京文化会館、自主事業の紹介

さて、今日始めるにあたって、東京文化会館がなぜ、今日のテーマを取り上げるのか、東京文化会館のご紹介とともに、その背景を簡単にお話しいたします。今からスライドを共有します。

スライド開始

東京文化会館は、クラシック音楽、オペラ、バレエなど舞台芸術を上演する都立文化施設として1961年に建設され、2021年には会館60周年を迎えました。日本のクラシック音楽

やバレエの歴史においては歴史が長いホールの一つです。

建物は、ル・コルビジエの弟子である前川國男が設計し、日本が誇るモダニズム建築として国内外で知られています。上野駅の目の前にありますので、ぜひ皆さんもお立ち寄りください。

東京文化会館では、東京都、また日本の文化政策に基づき、様々な自主事業を展開しています。自主事業は「創造発信」、「人材育成」、「教育普及・社会包摂」の三つの柱で構成されています。ゼロ歳から大人まで、あらゆる世代の成長の過程に寄り添える独自の音楽プログラムを展開しています。

2017 年度からは社会包摂を意識した事業を開始いたしました。今では、年齢や障害、社会的ハンディキャップのあるなしに関わらず、あらゆる人々が音楽鑑賞や音楽創造体験に参加できる機会を提供しています。多くの人が新たな文化創造に関わるができるように、日々取り組みを行っています。

例えば、特別支援学校や社会福祉団体でのワークショップ・コンサート、手話付きや英語版のワークショップの実施なども行っています。また職員向けのバリアフリー研修なども行っています。今、こちらの映像に出ているのは、2020年に刊行した『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』です。東京文化会館のウェブサイトで日本語、英語で公開していますので、よろしければご覧ください。この他にも自治体や大学、NPO 法人など、様々な団体と連携や交流をし、議論の場や活動プラットフォームの拡充や検証も行っています。ここで私たちの取り組みの紹介映像をご覧ください。音が出ます。

映像

(東京文化会館 コンビビアル・プロジェクトの紹介動画)

映像の共有をこれで一度止めます。ではまたこれからスライドの共有をします。

スライド再開

1-3. 東京文化会館コンビビアル・プロジェクトの紹介

2021 年度からは、新たに「コンビビアル・プロジェクト」という事業を開始いたしました。コンビビアル convivial、またはコンビビアリティ conviviality という言葉は、20 世紀の

哲学者イリイチが提唱した自立共生に関する概念です。共に生き生きと生きる、「共愉」などと訳されることもあります。特に、中央集権的な制度や組織に頼らずに、個人が地位や地域、人種、障害、性別や年齢、様々なコミュニティや社会的な背景の枠組みを越えて、個人が他者と自立的で創造的な交わりを持てる状態や環境のことを意味しています。

イリイチのこの概念では、企業、行政、医療、教育、市場、そして輸送、通信、法律など、様々な私たちを取り巻く社会的制度を「道具」に見立てています。本来、道具は人のために作られています。産業革命が起きてから資本主義が台頭してくると、人のために作られたはずの道具が、いつの間にか独り歩きをして、人を支配し奴隷化しているのではないだろうかといリイチは問いました。これは音楽にも当てはまるように思います。

東京文化会館では、その道具を今一度見直して、あらゆる人がアートを通じて喜びや生き甲斐を等しく共有できるコンビビアルな状態を創出することを目指しています。ですので、従来のアウトリーチ型の事業だけではなくて、エンジニアや当事者と共同しながら事業を開発・改善する取り組みにも少しずつ着手しています。

三つの事例をご紹介します。

例えば、表現や体験の拡張を目指して、楽器インターフェースの研究者である金箱淳一さんと、音を視覚化するシステムを導入した音楽ワークショップの開発を行いました。この写真は、金箱さんが開発された共遊楽器、「ラタタップ」を使用したワークショップです。聴覚障害のあるお子さんや保護者の方が参加くださいました。自分の腕や打楽器にセンサーを取り付けています。音の振動と映像の両方からアンサンブルを楽しむことができました。

他にもポルトガルのカーサ・ダ・ムジカや英国のボーンマス交響楽団を招いて、世代や障害を越えて誰もが演奏者になれる方法を考えた年もあります。今年はマンチェスター・カメラータの皆さんと、認知症ケアの音楽プログラムのエッセンスを学ぶ講座やトレーニングを開催しました。今、ご覧いただいている写真はボーンマス交響楽団で活動する指揮者のジェームズ・ローズさんです。彼は脳性麻痺がありますが、ドレイク・ミュージックと開発した指揮棒をメガネに付けたことで、指揮者として自分を表現する方法を獲得しました。今、彼は障害のあるアーティストたちとアンサンブルを作って BBC プロムスへ出演したり、プロの音楽家として活動を始めていますと聞いています。楽器やツールが少し拡張されることで、プロの音楽家と同等に音楽演奏にも参加することができるのです。

次の事例です。鑑賞体験を拡大するという観点から「東京文化会館リラックス・パフォーマンス」をご紹介します。2020 年から開始しました。自閉症や発達障害など、静かに聞くこと

や不安のある方、ご家族やご友人と一緒に安心してコンサートを楽しめるように様々な工夫を凝らしています。途中で難聴になられた方、中途失聴の方、通常のコンサートでは十分に楽しめないという方でも楽しめるように、様々なデバイスやヒアリンググループもご用意しています。アーカイブ映像も公開して、学校の教材として活用していただいたり、オンライン版のアウトリーチとして鑑賞できるようになっています。今年は11月19日に実施しました。マンチェスター・カメラータのアミーナさん、ナオミさんにもご出演いただいて、日本人音楽家やろう俳優と共演いただきました。そのアーカイブ映像も来年には公開いたしますので、是非皆さんご覧ください。ではここでスライドの共有を終わります。

スライド終了

1-4. なぜ「クリエイティブ・エイジング」なのか

さて、今日のテーマについて簡単にお話しします。今日のキーワードは「クリエイティブ・エイジング」です。

東京文化会館と豊中市立文化芸術センターでは、2022年8月から11月にかけて、イギリスのマンチェスター・カメラータの皆さんと協働して、認知症のある方でも楽しめる音楽プログラムを巡り、芸術団体の視点から考えるオンライン・レクチャーや、音楽家のためのトレーニング、実際にご当事者の方をお招きしたワークショップを行いました。

高齢社会は日本だけでなく、イギリスはじめ多くの国で社会課題の一つになっています。例えば、認知症を発症しても人生は続いていきます。より豊かに、自分らしく生きていくためにはどんなことができるのでしょうか。自分の家族や愛する人、大切な人が少しずつ知らない人になっていく。ご家族や周囲も、本人とより楽しい思い出を作りながら生きていくために、それはロング・グッバイと言われることもあります。その時間をどのように楽しむことができるのでしょうか。その時に音楽はどのようなことができるのか。そのようなことを考えました。

日本でも、文化施設やアート団体によるアウトリーチや多彩な音楽活動が盛んになりました。一方で、アート団体やアーティスト側が高齢者施設や社会福祉団体と活動をする際には、臨床現場に入る前に、学ぶべきことや知っておくべきことがたくさんあります。何よりも、アート分野や社会福祉・医療分野、中間支援団体、地域の行政など様々なセクターの連携がとても重要である。その連携がより良い活動に繋がっていく、社会が持続的になっていく、そのために必要であるということはここで申し上げるまでもありません。

この映像をご視聴くださっている皆様もアート領域だけではなく、保健医療やヘルスケア、教育研究機関、社会福祉法人・社会支援団体など、様々なご専門やバックグラウンドの方がいらっしやると思います。「認知症」や「高齢社会」が社会的なテーマであるのは明らかですが、それをより良く生きていくという観点から今日はクリエイティブ・エイジングを取り上げます。

音楽で認知症を緩和したり、病気を治したりすることはできませんが、皆さんが日々豊かな生活をしていくために、音楽の専門集団が何を社会的にオファーできるのか。3 ヶ月におよぶ東京と豊中での協働を振り返りながら、検討していきます。

1-5. 登壇者の紹介、今日の構成

ではここで、今日お話しくださる皆さんをご紹介しますと思います。まず最初に基調講演をくださる同志社女子大学の日下菜穂子先生です。続きまして、ディスカッションに参加してくださる皆さんをご紹介します。マンチェスター・カメラータからアミーナ・フサインさん、ナオミ・アタートンさん、そして事務局員のヘレナ・ブルさんです。日本側から三名の方にご登壇いただいております。まず、日本センチュリー交響楽団の小川和代さんです。そして豊中市立文化芸術センターの柿塚拓真さんです。柿塚さんは普段は神戸市民文化振興財団でもお仕事をなさっています。そして東京側からですが、社会福祉法人千代田区社会福祉協議会の川野圭一さんです。よろしくお願いします。今日、残念ながらこの場にご同席いただけないのですが、豊中から特定非営利活動法人オリーブの園の名倉友紀さんにもご参加いただいております。後でインタビューを共有します。このようなメンバーでお送りします。

今日の構成をご説明いたします。今日の構成は大きく二つに分かれています。まず最初にレクチャーがあります。同志社女子大学の日下菜穂子先生によるクリエイティブ・エイジングについての基調講演になります。後半は豊中と東京で実践を振り返るためのオープンディスカッションを行っていきます。

では日下先生、大変お待たせしました。よろしくお願いいたします。

2. 基調講演「クリエイティブ・エイジング」 日下菜穂子

日下:

よろしくお願いします。では画面共有させていただきます。画面、見えますでしょうか。

杉山:

見えます。大丈夫です。

日下:

はい、少しお待ちください。では始めさせていただきます。

同志社女子大学の日下菜穂子と申します。今日は登壇者の皆様と、オンライン越しですがお会いできるのを楽しみに参りました。またこのようなお話しする機会をいただき、本当にありがとうございます。私からは、今日のテーマでもありますクリエイティブ・エイジングで、「アートによる創造性と人生 100 年時代」というテーマでお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めにこちらのスライドをご覧ください。日本が 48.6 歳、英国が 40.5 歳、この年齢は何を表していると思われるでしょうか。いかがでしょう。

恐らくご存知の方も多いと思うのですが、この二つの国の数字なのですが、中位年齢と言いまして、人口を同数の半分に分けた時の境目になる年齢を言います。この日本の中位年齢は世界一高い数字となっていて、今 48 歳です。英国は 40 歳で約 8 歳の差があるのですが、この表では世界の 10 位に位置しています。どちらもやはり高齢化が進んでいる国と言えます。この中位年齢でいうと、日本の国民のおよそ半数近くが 50 歳以上なので、40 や 30 の方々はまだまだ若者ということになります。

またこのような高齢化が進む中で、どのくらい長生きしたいと皆さんは思われるでしょうか。今の最高齢の方がすでに 110 歳を超えて、間もなく 120 歳になろうとされています。生物学的には私たちは 125 歳ぐらいまで生きられるのではないかとされているのですが、皆さんは 120 まで生きてみたいと思われるでしょうか。こちらは長生きできる可能性を表す表です。例えばなのですが、現在 40 歳の男性なら 90 歳まで生きられる可能性は 22%です。100 人に 1 人は 100 歳になれる可能性があります。女性だとその可能性がさらに高くなって、100 歳になれる可能性は 6%にまで上がります。この確率は長く生きれば生きるほど上がるので、90 歳まで生きられれば 110 歳まで生きるということは夢ではなくて、1000 人に一人の方が 110 歳まで生きることができるといようなことになっています。

このように、長生きできるということはとても喜ばしいことなのですが、誰も経験したことがないこの 100 年以上続く長い人生を私たちはどのように生きたら良いのか、そして長く生きることを喜べる社会にするにはどうしたら良いのかということが、個人にとっても、社会全体にとっても大きな課題になっています。私は心理学の立場で高齢者研究を続けてきましたが、多くの方のライフヒストリーを聞く中で、一日一日を生きている、そういうことそのものがとても芸術的でクリエイティブなことだと思ふようなことがあります。長く生きた人の人生には様々な思いが織り込まれていて、その思いが他の人たちに伝わると感動を通して何か広がっていくというようなことがあります。そして、その思いが次の世代の人たちに伝わって、またその人たちの人生に影響を与えて形を変えて受け継がれていくというような、個人の人生が様々な人や文化、社会というものと相互に作用しながら、大きな人生というものが、織物というか、そういう一つの作品として仕上がっていくような、そういうアートを人々の人生の中に感じます。ですので、こういうクリエイティブ・エイジングとは多様な人たちが良く生きようとして、そのために生き生きと関わり合うこのライフサイクルの循環と言えるのではないのでしょうか。このライフサイクルの循環の中に一人一人の人生が位置づけられて生きる意味が作り出されていく、そういう関わり合いが生まれることで高齢社会の未来に希望を見つけていくことができるのではないかと言えます。

このクリエイティブ・エイジングの実践に人、そして人々を取り巻く環境、そして人や環境の間に生まれる空間、その三つがとても大切な条件になってきます。本日の講演の中では、この三つの条件について、アート、特に文化芸術活動に当てはまる考え方を取り上げて紹介させていただきたいと思います。短い時間の中ですので少し概要の説明になりますが、またディスカッションや今後何か機会がありましたら、議論を深めさせていただけたらと思います。

ではまずクリエイティブ・エイジングの実践、一つ目の条件として人が挙げられます。本日、この後、取り上げられる音楽ワークショップの目的は、個人と社会のウェルビーイングにあります。そのように、アートを介したコミュニティ活動は何らかの課題に向けたアプローチが取られています。ウェルビーイングといった大きな概念、こういった問題にアプローチする時、また答えがないような、解決が難しい大きな課題に対して、創造性の重要性というものが改めて認識されています。

こちらのスライドにあるように、例えば SDGs に関連して、国連は 2017 年に創造性とイノベーションの日というのを制定しました。この国連の制定した創造性とイノベーションの日において、この創造性の位置づけなのですが、社会的に意義のある価値を生み出して変革を起こしていく、社会の中に変革を起こしていくために大切な力だとして重視されているということです。毎年 4 月に様々なイベントなどを通して啓発の活動が展開されています。

ここで改めて、創造性とはということです。創造性については皆さんよくご存知のことだとは思いますが、まったく何もないところから生まれるというよりも、すでにある知識、そして情報を結びあわせて新しいものに変えていく、そういう新しい物事を生み出す力とされています。

これまで心理学の研究では、主に創造やイノベーションの問題というのは、個人の能力として扱われることがほとんどでした。しかし、近年になってからは、この創造性が発揮される上での文脈や環境といった創造性の発露、どういうプロセス、どういう環境が整えば、私たちが創造的でいられるのか、社会が創造的に転換していくのか、変化していくのかといったこと、そのプロセスに注目が集まるようになってきました。ここでポイントになるのが、この創造性が単に個人の力によるものではないということです。この課題や問題と向き合ってそれを解決することは、とても創造的でイノベティブな行為です。これを強くて能力のある個人に委ねて実現するというのでは自己責任論に陥ってしまって、できる人とできない人との分断が生まれる原因になってしまいます。この個人主義的な限界を乗り越えて、より幅広い人々との協働で集合的な創造を実行しようというのが集合的創造性の考え方です。一人一人は弱くて不完全かも知れませんが、そうした人々が集まることで新しい物事を作り出そうとする、この集団を形成する人々の相互作用によって誘発されて生まれ出てくる、そういう創造性というのがこの集合的創造性だと言われています。

この集合的創造性の例としてアート・コレクティブの流れがあります。私はアートの専門家ではないので、少しこちらは伝聞になります。ですが、このアート・コレクティブの特徴は、建築家やデザイナーなど従来のアートの領域にとどまらない様々な領域の方々、人たちが集まる点にあります。また、この集まった組織が徒弟制のようなチームワーキングではなくて、非常にフラットで柔軟な組織であるということが、また特徴の一つになっています。こちらの写真はアッセンブルという英国の建築家のチームの写真です。このアッセンブルのメンバーたちは、リバプールの荒廃した住宅街の再生に、地域住民の方々を巻き込んで協働して地域の再生を試みた、そういうプロジェクトです。このプロジェクトの他に数々の取り組みを展開しているのですが、このリバプールのプロジェクトで建築家としては初めて英国の現代アートの権威ある賞であるターナー賞を受賞しました。そのことで、イギリスだけではなく、日本や世界で広くアート・コレクティブの集団としてこのアッセンブルが認められるようになったという経緯があります。近年ではソーシャル・メディアが普及していますが、このソーシャル・メディアの普及の影響でアート・コレクティブが世界規模の広がりを見せています。SNS を通じた直接的な活動ができることで、一般の人たちが物事を変化させる力を得たと言われています。例えば、今日のこのシンポジウムですが、こちらもたくさんの方々をご覧になると思います。その中で、またメンバーが集まって新しい展開をしていこうという動きが出てくると、これもまたアート・コレクティブになっていくのだと思います。そういう SNS の普及し

た社会の背景の中で、私たちは集合的に創造性を働かせるような可能性が非常に広がっていると言えるわけです。

この多様な人が協働して建築やアート作品を作り出していくという上で、この協働のために二つのことが重要だとされています。まず一つ目は、同じ目標を達成するために共に活動する、この同じ目的、目標を達成する、目標を同じくするという点です。二つ目は、集団の中にいる人たちが、統一された信念を持っている。コンセプトのようなものですね。そういうコンセプトを一緒にやっているすべての人たちが共有しているということ、この二つがとても大切だと言われています。この2点については、このマンチェスター・カメラータの音楽プロジェクトや、日本で、東京文化会館で行われているプロジェクトでも非常に大切にされている2点で、研修や実践の中で丁寧に取り組まれているという印象があります。ですので、後ほどのディスカッションの中でも話題の中に含まれてくるのではないかと思います。

こういった多様な人が協働する上で必要になる環境の条件について、さらに参加型文化という概念をあげて少し触れてみたいと思います。多様な人が集まって、そこで創造性を発揮していくといった時に必要なのが、ある程度そういった人が集まれる、そしてその人たちが生き生きと活動できる環境の条件です。その環境の条件として、先ほど挙げたような、目的を共有するとかコンセプトがはっきりしている、一つのコンセプトを人々がちゃんと理解しているということがあるのですが、そういったことが実現されるために何が必要かというのをこちらの参加型文化という概念で簡潔に説明されていますので、少しご紹介したいと思います。

この参加型文化は、メディア学者のヘンリー・ジェンキンスという方が提唱した言葉です。新しい物事を作ったり広めたりするところに主体的に参加しようとする人々を誘う文化という意味です。ソーシャル・ネットワークや Wikipedia がこの参加型文化の具体例として挙げられます。この参加型文化はコミュニティのアート・プロジェクトにも当てはめることができます。この参加型文化は、同じ目的を共有する人たちが構成されていて、このようなコミュニティに人々の参加を促して協働を成り立たせる条件として、ヘンリー・ジェンキンス氏はこちらのスライドの五つの条件を挙げています。一つ目が、芸術的表現や市民活動に対して参加するための障壁が低い、とても参加しやすい、日常生活の中にこういった活動が位置づけられているという点です。二つ目は、自分たちが物を作ったりアート作品を創造する、そういったプロセスを共有したり、そしてまたできた作品を他の人たちと共有して楽しむ、そういったことに強く焦点が当てられてサポートされるということです。何よりも、物を作っていく、作ることが楽しくなるような仕組みがあるということです。三つ目は、何よりも経験してわかる、「だからまずはやってみましょう」、「色々不安もあるけど一回やってみましょう」、「やってみるとわかることがあるんだ」ということが初心者の人たちに伝えられます。そういったこ

とについて、何か文章に書くのではなくて、失敗を恐れずにやりやすい環境を用意して、少しやってみると手を伸ばしたくなる。そういったようなアフォーダンスがある。その環境の中に組み込まれているということが大事、とされています。四つ目は、一人一人がその場にいることが意味がある。そしてこの場に何か貢献していくということに意味が生まれてくるのだと誰もが信じているということです。そのように信じているメンバーがそこにいるということが大事だと言われています。五つ目は、お互いに少なからず何らかの程度の社会的繋がりを感じ合っている、何か共同体、一緒に何か結びついているような意識がある、そういうメンバーがいるということが大切だと言われています。こういう条件が揃うことによって、人々がお互いの違いを超えて、多様な人が協働しやすい空間になると言われています。本日紹介される音楽ワークショップの中では、これらの環境が質の高い条件で整えられているように思います。私たちがその音楽プログラムに触れることによって、こうした条件をどのようにして音楽というものを通して実現できるのかということを教えてくれるはずだと思います。

私は豊中センチュリーオーケストラとマンチェスター・カメラータの音楽ワークショップで、初めてこのプロジェクトに関わらせていただきました。以降は東京文化会館で行われる音楽ワークショップに、主には評価者の立場で関わらせていただくこともあり、そういった時にはこのプロセスや参加者の関係性の変化というものをある程度文脈的に観察して分析するという質的なアプローチをとっています。そういう評価の中で大変興味深いのは、この即興の音楽ワークショップ・プログラムの中では、メンバー間のコミュニケーションが楽器の演奏だけではなく、息遣い、そして仕草や表情といった非言語のコミュニケーションで多く観察されることです。この言葉を越えたメッセージというものが、とても強く人々の心に響きます。その非言語のコミュニケーションから見えてきたものは、どのような参加の仕方であっても、それぞれに役割があって、場の創造にすべての人が何らかの貢献をしているということです。そして、この音楽ワークショップの場に貢献する可能性を誰もが持っているという信頼の感覚が、スタッフだけではなくて参加者の間にも徐々に広がっていくというのをこの音楽ワークショップの実践が何度か繰り返されていく中で同じメンバーたちの間で芽生えていくということを観察することができました。そのことに気づく瞬間というのは、研究者ではなくてもその場にいる人たちと共有できるもので、信頼が芽生えていく何か繋がりのようなものが非言語のメッセージを通して伝わってくる時というのはとても感動的なものです。こうした伝わってくる何かその場の熱量のようなものというのが、いわゆる空間のエネルギーなのだと思います。こうした成功した実践の中で沸き立ってくる空間の熱量が感動という形で体を通して実感で伝わってくるので、ここはなかなか言葉にして伝えたり、データに見せるということが難しいことではあります。ただ、適切な表現は思いつかないのですが、こういう熱量のようなものが、おそらくアートの喜びだと言えるのではないのでしょうか。

この空間に沸き立つ熱量を思想家のイリイチ、先ほどコンビビアル・プロジェクトの紹介の中で杉山さんも挙げていました、この思想家のイリイチはコンビビアルリティという言葉で表現しています。コンビビアルは東京文化会館が音楽ワークショップのプロジェクト名にも付けていただいているのですが、このコンビビアルはもともと祝祭を意味する言葉です。イリイチは人間の本来的な関わり合いの中で実現される一人一人の自由な営み、まずは個の自立が実現されることだと言っています。そしてそこにいる人たちの中で共有できる何か固有の、自分たち独自の信念、価値が生まれてくることだ。その喜び、それをともに喜ぶ祝祭がコンビビアルというふうに表現しているわけです。この時に大切なのは、アート・コレクティブの説明でも申し上げましたように、そこにいる人たちが何か一つの目標に向かっている、この場で美しい音楽を奏でたいといった信念を持っているということです。イリイチは、資本主義社会の生産主義で管理主義的に管理された社会に対して痛烈な批判をした思想家なのですが、その管理社会の中では、健康や財産といった個人の獲得を目的とする利己的なゴールを目指すということが起こってきます。この獲得ではなくて、すべての人たちで共有できる普遍的なゴールに向かって人々が自分たちの持てる力をシェアしあう、公平に分配しあうというような社会がコンビビアルだと言いました。ですから、目指すべきゴールというのは、何かゴールというよりも、どこか美であったり善であったりするような普遍の価値を共有する活動にもっと目を向けるべきだとイリイチは言っています。アートにはこの普遍の価値を人々と共有する可能性があります。五感で感じる美しいハーモニーとか、共に手を動かす人々が醸し出す熱量に私たちは心を動かして、その情景に貢献したことを喜び合うことができます。ですので、コンビビアルリティは形ではなくて私たちの体で感じる熱量で、その熱量を感じると人はまたその場に戻ってきたくくなります。そして何度もそうした実践が繰り返して行われているうちにコミュニティとしての絆が深まっていくと言えます。

今日取り上げられるこの音楽ワークショップのお話でもそうですが、こういう美しい空間、この美しい場の中で沸き立つコンビビアルリティというものが、こうしたワークショップを通して世界中に広がっていくことを願っています。ありがとうございました。

杉山：

日下先生、ありがとうございました。

今、日下先生の三つのライフサイクルを巡る循環というテーマで、人と集団、集合的創造性、そして環境について言えば参加型文化、そして空間という観点でのコンビビアルリティという概念のご説明がありました。どれも私たちのこの実践に本当に深く関わる概念や理論だったと思います。後半のディスカッションの中で少しそういったことの具体的な例が出てくると思いますので、皆さん、楽しみにしててください。

ではここで一度映像の方は休憩とします。では皆さん、ここから休憩にします。5 分間休憩にしたいと思いますので、皆さん、50 分に戻ってきてください。

マイクとカメラは休憩中はオフで大丈夫です。日下先生、本当にありがとうございました。

収録中断

日下:

ありがとう。杉山さん、パトカーか救急車の音が入りませんでしたか。

杉山:

大丈夫でした。

日下:

ずっと鳴っていたので、よかったです。ありがとうございます。

杉山:

はい、大丈夫です。ありがとうございます。

休憩

杉山:

では皆さん、お戻りでしょうか。大丈夫ですか。これで全員いますか。日下先生は後でまた登場していただくということでよいでしょうか。では、これで皆さんよければ始めさせていただきます。皆さん、ご準備よろしければ始めさせていただきます。通訳の皆さんもよろしくお願いします。では「また後半スタートです」というところから始め…ありがとうございます。

収録再開

3. 実施報告－2022年8月～11月 大阪、東京、オンライン

では後半のディスカッションを開始いたします。後半はこのように進めていきたいと思えます。まず最初に私の方から8月から11月にかけてどのような活動をマンチェスター・カメラータの皆さんと、豊中と東京でやったのかを簡単にご報告します。その後は、先ほどご紹介しました登壇者の方に少しずつ実際に体験されたご感想であったり、振り返ってどうだったかというのをそれぞれの立場からご発言いただきたいと思えます。

では、私の方から皆さんと一緒にまたスライドを共有していきます。

スライド開始

8月から11月にこんなにたくさんのことを行いました。まず8月に3日間かけて公開レクチャー・ディスカッションと、そして音楽家のためのプロフェッショナル・トレーニングを行いました。11月には実際にマンチェスター・カメラータのメンバーが来日して、豊中で2日間、お茶の間オーケストラの勉強会と実践。そして6日間、東京でトレーニング、それから実際のワークショップ、公演を行なって今日に至るという形です。ちょっと写真も紹介しながらご紹介します。

豊中では日本センチュリー交響楽団や、大阪を拠点に活動する音楽家の方たちとトレーニングを行なって、入居者施設や、また見ていただいているように多世代型の音楽ワークショップを行いました。このような形でアミーナさん、ナオミさんも皆さんと一緒にワークショップを行っております。そして東京では、千代田区社会福祉協議会のご協力のもと、音楽家のトレーニング、そして実際に認知症の御当事者の方をお招きした音楽ワークショップを実施しました。広々とした空間でこのような感じで行われました。東京ではリラックス・パフォーマン스에アミーナさんとナオミさんもご出演くださりまして、400名を超えるお客様の前で日本人の音楽家と一緒に演奏を行いました。このような形になっています。詳細についてはまたそれぞれの報告者の方から共有をさせていただきます。

では早速ですが、ここで共有をストップします。

スライド終了

4. オープン・ディスカッションー協働をふりかえって

4-1. ヘレナ、アミーナ、ナオミ：3カ月間の日本での経験をふりかえって

このように、マンチェスター・カメラータの皆さんは、日本の豊中市、東京、それぞれの音楽家や実際に市民の方々と交流をしてきました。振り返ってみれば本当にあっという間の、でも非常に濃密な時間だったと思います。まず、アミーナさん、ナオミさん、ヘレナさんにおうかがいしたいのですが、率直に終えてみて、今、どうでしたかということを知りたいです。日本でのトレーニング、そしてミュージック・イン・マインドのワークショップをやってみてどうでしたか。イギリスの実践と少し違うなと思った事などがあれば是非お話しください。

ヘレナ：

皆さん、こんにちは。イギリス人ですので、勝手に私が最初に喋ると決めてしまいました。ご質問いただきありがとうございます。本当に、今、振り返ってみるのはとても面白い、興味深いと思います。これまでやってきたこと、そして間に1週間挟んでミュージック・イン・マインドのワークショップを挟んだりトレーニングをしたりしました。そしてその中から学んだことを振り返るちょうど良い時だと思います。

まず最初の印象なのですが、今回初めて日本に来ました。ですので、それ自体がとてもエキサイティングなことでした。しかし、たくさんの共通点があるのを知って、本当に心強く思いました。私たちが高齢者と取り組んだり、認知症の方と取り組んだりするのと同じような目的を皆さんが抱えながら音楽を使ったプログラムをやっているのだなと思いました。また色々なアイデアを皆さんがお持ちで、大阪、そして東京でお持ちだというのを見て、イギリスではそれほど発展していないこともありました。特に多世代にわたるワークショップ、その辺を発展させようとしているというのが。そして家族の価値観をもう一度育もうとされている。小さいお子さんも高齢者の方とケアの現場で交流をするというようなところも見られました。ですので、私は再確認をすることができたと思いました。なぜこういう形でやろうとしているのか、なぜこれを皆と共有しようとしているのか、それも共通の目的を持っている人たちと共有するのはなぜなのか、それを考え直すことができました。これをまたさらに発展させて、たくさんの文化に貢献したいと思います。色々な人生を歩んできた人たち、あるいは認知症の症状もいろいろあると思いますので、その人たちにも地元の社会に溶け込んでもらえるようにしたいと思います。アミーナさん、ナオミさん、何か付け足すことありますか。

ナオミ：

日本にまた戻ってくることができてとても嬉しく思いました。そしてこの間、パンデミック以前に来た時からだいぶ進展したのを見ることができました。また、パンデミックの中でも

工夫をしながらやっていらっしゃるというのを見ることができました。また、参加者の人たちが前に参加してくださった方、2018 年の方々は音楽に対する自信もついているし、色々理解も進んでいると思いました。私たちのアプローチに対する理解も進んでいるということが明確に見えました。また、新しく入ってきた方々、大阪、そして東京で新たに入ってきた方々もオンラインのワークショップで、これは私たちにとって新しいベンチャーで、やはりパンデミックに合わせて慣れていかなければならないものだったのですが、すでにこの新しいアプローチに対する理解も進んでいて素晴らしかったと思います。

アミーナ:

ナオミさん、ありがとうございます。私もまったく同感です。ナオミさんが、今、言ってくださったこと、ヘレナさんが言ってくださったことの通りだと思います。本当に前に前進していると考えています。特に今、長い間日本へ行くことができないという渡航制限があった中で、対面でできなかった中で、大進歩があったと思います。

私にとってキーワードとして出てきていることとしては、新しい自由な気持ちが湧いていたというお話を聞きました。新しい実践、新しいことを試みる時には、どうしても誰も不安になってしまうと思うのです。新しい手法を身につけなければいけない、新しいやり方に対してはどうしても恐怖感があります。失敗したくないという気持ちがあると思うのです。ですので、今回はそういうことがなく、より自由に取り組むことができたと感じています。これは音楽的にも社会的にも大きな進歩だと感じています。それは今回の調整や色々な準備のおかげだと思っています。この旅を皆さんと共にしてからどんどん進んできていると思います。この先をとっても楽しみにしています。

杉山:

ありがとうございます。三人の方からそれぞれお話をうかがって、「そうか」と思うこともたくさんありました。特にヘレナさんは今回初めて日本にいらしたということ、そしてナオミさんとアミーナさんは2016年17年に豊中に2年間いらっしゃっていて、その時との違いとか、それぞれ皆さん、三者三様でお感じになっていることが違うというのが非常に印象的でした。

ではここで、皆さん、実際のカメラータのミュージック・イン・マインドの手法ってどのようなものなのか、今日初めて知るという方もいらっしゃいますし、ここで少しだけ東京で実施したワークショップの一部をご覧いただきたいと思います。ご覧いただいている皆さんにお願いです。この映像は、このレクチャーのために特別に編集したものです。どうか録音や録画など

されないようにお願いします。無断で使うことがないようにお願いいたします。では映像を共有していきます。

映像

今、このように映像を簡単に、45 分もやっていたものを 5 分にかいつまんで編集したのですが、なんとなく雰囲気は皆さんにも伝わったかなと思います。このミュージック・イン・マインドの手法については、そしてまたその理念については、8 月に実施した公開レクチャー&ディスカッションの報告書を是非ご覧ください。オンラインで公開しますので、そちらをご覧ください。

4-2. アミーナ、ナオミ：「ミュージック・イン・マインド」の実践で大切にしていること

杉山：

こちらのミュージック・イン・マインドというのは、彼らの言葉を借りて言うのであれば、言葉がないところが音楽になっていくところなので、認知症になって非言語的なコミュニケーションでないとしコミュニケーションが難しい方、簡単に言ってしまうと言語でのコミュニケーションがどんどん苦になってしまうということがよくあります。その時に例えば音であれば、今の自分を表現できるのかと、そういったところを音楽家が彼らのサポートをしていくことで、本人たちが言葉ではなくて音でおしゃべりをするというのがテーマになっている手法です。そのような雰囲気を味わっていただけたらと思います。

改めてアミーナさんとナオミさんにおうかがいしたいのですが、このミュージック・イン・マインドで皆さんが特に大切にしていること、それぞれお二人に二つずつお尋ねしたいのですがいかがでしょうか。ナオミさんは普段ホルンの奏者として関わっていらっしゃる、アミーナさんはフルートの首席奏者でもあります、音楽療法士の立場でも関わっていらっしゃるというふうにこの一週間経験してきました。それぞれのお二人の立場から教えていただければ嬉しいです。

ナオミ：

ありがとうございます。二つに絞り込むということでしたら、まず参加者センター、参加者を重視しています。参加者にリードされている、参加者の方からアイデアをもらう。本当に些細なことかも知れませんが、それを使ってグループの皆と共有していくということ。そして

う一つというのは、適応性です。何があるか分からないのです。何が起きるか分からないのです。その時の状況次第ということなので、そこに適応していくことをやっています。

アミーナ：

ナオミさん、とても良い返事をしてくださいました。全部私の代わりに言ってくれていると思うのですが、私にとって二つということでしたら、一番重要な二つ、今のナオミさんの内容に補足となりますが、まず我々は参加者を信用しています。信じています。人として、そして創造力というところ、その可能性を信じています。彼らとはもちろん初対面ですが、彼らは色々な面白い能力を持ってくださっている。我々の環境の中で色々な事を貢献できるということは信用しています。そして二つ目のミュージック・イン・マインドで大切にしていることとしましては、人の心、皆一人一人の深い心の奥の中にあるところ、人間としてのアイデンティティと繋げたい、そこに絆を持ちたいということです。どういう病気を持っているのか、あるのか、どういう状況にいらっしゃるのかということは関係なく、そういうものを置いて、機能している人間、医療的な見方ではなく、その人というところと繋がりたいということを大切にしています。

杉山：

ありがとうございます。今、ナオミさんとアミーナさんが大切にしているとおっしゃってくださったところ、まさにそれは日下先生の先ほどのレクチャーの中でご指摘くださった集合的創造性であったり、参加型文化であったり、コンビビアリティに繋がったりする、本当にエッセンスのところを体現なさっているのだなと思いました。

4-3. 小川：オーケストラ奏者からみた「ミュージック・イン・マインド」の魅力

杉山：

ではここで、豊中でトレーニングに参加くださって、2016年からずっと高齢者向けの音楽ワークショップの実践を重ねている音楽家の方にもお話をうかがいたいと思います。日本センチュリー交響楽団のバイオリン奏者の小川和代さんです。小川さん、よろしくお願いします。

ミュージック・イン・マインドは音楽療法の手法も取り入れつつも、音楽家のプロフェッショナルに身体化されているような技法であったり、例えばそれはハーモニーを奏でるとかメロディーをちょっと引き出すと、そういったところを重視している手法です。例えば、今、ワークショップの映像を観ていただいた時もそうであったように、参加者の方が奏でる断片的な

音楽の要素を瞬時に拾い上げて、音楽家として面白いと思うもの、美しいと思うものをだんだんエクスパンドする。そこを積み上げていく。そうすることで参加者の人の声をより聞こえやすくしていくといった役目を担っているというふうにトレーニングを私も横で見ていて感じていました。それは非常に難しいことであって、音楽家なら誰でもできるというわけではないと思うのですが、こういった実践を音楽家が行う意味であったり、初めて音楽家であるからこそその対話が紡がれるような環境が整えられるといったことがあると思います。そこで小川さんに率直なご意見をうかがいたいのですが、音楽家である小川さんにとってミュージック・イン・マインドはどのような魅力がありますか。また、難しいと思うことはありましたか。

小川:

はい、ミュージック・イン・マインドの素晴らしいところは、言葉ではなくて音や音楽、それだけではなくて人の仕草、そういうものを、ちょっとした空気が動く音や気配とかそういうものでその人の中に入っていくこともできるし、私たちの中にあるものをも相手に伝えることができる、そして新しいものができ、作ることができる。そういう素晴らしさがあると思います。

難しいところは、私たちオーケストラ、私はオーケストラ・プレイヤーですが、私はバイオリンを弾いています。バイオリンを弾いて、指揮者を見て、指揮者の指示を仰いで与えられた楽譜で演奏することは何十年もトレーニングして、いっぱいやってそれを仕事にしているのですが、ミュージック・イン・マインドというのは、楽器が上手に弾けて楽譜があるわけでもないし、指揮者がいるわけでもないし、ではどうしたらよいのかというところで、指揮者は皆が指揮者、参加者も指揮者の時があるし、私たちが指揮者の時もある、指揮者が色々なところであって色々な音楽が生まれてくるのですが、決まった楽譜にないところを表現するというのが、一番最初に、今でもそうですが、とても難しく課題に残っています。そんなところです。

杉山:

ありがとうございます。本当にそうだと思います。やはりクラシック音楽の伝統的なトレーニングだと、楽譜があってそれを再現する。忠実に作曲家が意図したことを私たちが、再現という言い方は良くないかも知れないですが、そこから音楽家、演奏家のクリエイティビティを足して演奏にしていくというところがありますが、まず楽譜がないとか、最初にくるポイントが変わってくることが非常に音楽家の方にとっても戸惑いがあるのではないだろうかと思っています。

4-4. 小川：「ミュージック・イン・マインド」が音楽家に与えてくれるもの

杉山：

小川さんは2016年に初めてカメラータが来日した時にもトレーニングやワークショップに参加されて、それ以来様々な、市内でも活動を重ねてきていらっしゃると思います。今年5年ぶりに再会されて、改めてトレーニングに参加して一緒にワークショップをなさっていましたが、何かご自身の中で変わったなと思うことや、音楽家として何か影響を受けたな、5年間を振り返ってみて影響を受けたなと思うようなことはありましたか。

小川：

はい、夏の研修会の時に、私たちが色々ワークショップをやっている時に、一番最初のアプローチ、「さあ皆さん、これをやりましょう」というわけでもなく、皆のアイデアを少しずつ自然に引き出す時の引き出し方というか、参加者の人たちがアプローチする時間をすごく長い間、待たないといけない時があるのですが、それがやはりマンチェスターの人と最後に研修を受けてから色々なところでワークショップをやってきましたが、それはなかなか待てない。何か自分たちからアクションを起こしたい。しなければいけないのではないかという既成概念がやはりどこか強かったのです。それでワークショップが終わって、何か形になるものがないか、そういうものを探す自分がどこかにいて、それで夏の研修の時に「私たちのやっていることはすごくプロセスが大事なんですよ」という言葉を何度もナオミさんとアミーナさんは言っていたら、何かその言葉を一番忘れていたなと思ったのです。プロセス、その人たち、自分たち、一緒に作ってやっているワークショップでのプロセス、そこが大事ということをすごく感じました。この間、秋に一緒にワークショップをさせていただいて、その時に実感したのは、4年前よりは少し自分自身慣れてきたというのもあるかも知れないのですが、演奏家としてのワークショップの素晴らしさ、ナオミさん、アミーナさん、ヘレナさんが人間として素晴らしいこともわかります。わかるのですが、音楽家としても素晴らしいのだなというところの響きが、やはり一緒にやっていて実感しました。だからそういうものも、素晴らしい響きのワークショップができればよいなと、今、すごく思っています。

杉山：

ありがとうございます。そうなのです。このミュージック・イン・マインドのワークショップがまさに象徴的なのですが、その場に流れている空気の温かさというか、会場の温度感というか、その柔らかさも含めて、非常にその参加者の方への影響も高いし、それがひいてはプ

ロセスそのものにも影響してくる非常に重要な要になっているなと私たちも、私は普段マネージメントとかコーディネート側で立ち会っていますが、非常に今回学ぶところも多かったです。小川さん、ありがとうございました。

4-5. 名倉：オリーブの園における事例、音楽療法の現状

では、続いてなのですが、今日この場にいらっしゃらなかったのですが、豊中市で 2016 年の実践の時からご協力くださっている NPO 法人オリーブの園の名倉友紀さんに事前にインタビューをいただきました。その映像を共有したいと思います。では映像を共有します。

映像開始

杉山：

今日は、特定非営利法人オリーブの園、名倉友紀さんにお時間を頂戴いたしました。今日は名倉さんに、実際にカメラタのワークショップに参加していただいていたってどうだったのか、そして社会福祉の現場でどのようにワークショップが受け入れられているのか、そういった現状についておうかがいしたいと思います。名倉さん、よろしくお願いいたします。

名倉：

よろしくお願いいたします。

杉山・

名倉さんは音楽も専門に勉強されて、今、社会福祉の現場でお仕事なのですが、名倉さんがどういったお立場で、今、オリーブの園に関わっていらっしゃるのか、そういったところからお話しいただけますでしょうか。

名倉：

私は現在豊中市の NPO 法人オリーブの園に所属しております。仕事は音楽療法士として音楽で利用者様に関わる仕事をしているのですが、その他に法人の人材育成や空間デザインやアートに関するコーディネートをするような、少し珍しい業種になるかと思うのですが、なんでもやっております。

杉山：

なるほど、すごく多岐にわたるお仕事なのですね。ありがとうございます。オリーブの園では、色々な施設を持たれていますが、運営の中で、音楽療法士による音楽療法も実践されているとうかがっています。今日お聞きの方の中には、日本の社会福祉施設にすごく精通していらっしゃる方もいれば、まだ実体験がない方もいらっしゃると思うので、普段どのような音楽療法が行われているのか、頻度や目的なども含めて、少し簡単にご紹介いただけますでしょうか。

名倉：

はい、わかりました。まずオリーブの園は、介護予防分野と、それからグループホームの分野、そしてその他もあるのですが、高齢者分野では市営の住宅の孤立予防に関するシルバーハウジング事業というのがありまして、そういう事業をしています。

その中で音楽は、シルバーハウジング事業の中ではコミュニティに関する音楽を扱っています。そして介護予防の方では介護予防、そして楽しみ、レクリエーション的な音楽の使い方をしています。そして音楽療法で言うと、グループホーム、認知症ケア専門にしているところなのですが、そちらの方で音楽療法をしています。

グループホームの方の音楽療法について少し詳しくお話しさせていただきますと、グループの形、グループ・セッションと言うのですが、少人数で、多くても8人ぐらいまでのグループで、月に3回行なっています。大体時間は1時間ぐらいで、レクリエーション的なものと、グループなのでそれぞれの個々のニーズに深く寄り添うことはちょっと難しいですが、レクリエーションを基盤にして行なっています。そしてマンツーマンのセッションも行なっていて、マンツーマンの方は月に2回ずつ平均的に行なっています。そちらの方は個別で希望制になっておりまして、介護保険外のサービス提供になっています。そちらの方はマンツーマンですので、本当に個々のニーズに応じて行うことができます。グループの方は、認知症を皆さんお持ちでいらっしゃるの、まず認知症のBPSDという周辺症状、中でも不安の緩和に役立っています。それから、認知症の二次予防と言われる、いわゆる認知症にはなっているがそれ以上悪化させないという二次予防、そして三次予防はなるべく苦痛や不安を緩和、最小限にするというところを主に目指しています。そしてグループホームは看取りまで行なっていますので、ターミナルケアに移行した場合には看取りの方に対応する音楽療法というのを行なっています。

杉山：

音楽療法とひと言に言っても、幅広い目的、幅広い対象に、ここで取り扱われているそのも

ので本当に個別にその日のご体調とか、変えていらっしゃるのだろうなと思いながらうかがっておりました。ありがとうございます。

4-6. 名倉：創造的な音楽ワークショップがもたらした変化

杉山：

オリーブの園の皆さんの施設では、2017 年から野田住宅でマンチェスター・カメラータの皆さんや日本センチュリー交響楽団、豊中市立芸術文化センターと協力して、いわゆる音楽療法のアプローチを使った音楽のワークショップ、音楽療法としては扱わないけれども、という活動を継続的に続けていらっしゃるとうかがっております。そういった活動に参加されているいわゆる高齢者の方ですとか、利用者さんに具体的な変化や何か日頃の活動や生活の中で変わったなとお感じになっていることはありますか。

名倉：

まず、2017 年から 18 年にその野田住宅というところでコミュニティ・プログラムを実施していただきました。受け入れたのですが、受け入れの前から音楽という活動とかコミュニティ作りの活動はやっているの、皆さんは「そんな感じかなあ」という感じで集まってくださいました。そこは先ほどご説明したシルバーハウジング事業というところなのですが、一番の目的は孤立、孤独を予防するというのが狙いになっておりまして、それぞれ生活に不安や心配を抱えていらっしゃる方が対象者ですので、その方たちの生活相談や毎日の安否確認というのが事業になっています。そしてそのコミュニティを強くするというところで音楽の活動の話がありましたので、喜んで参加させていただきました。

変わったところというのは、皆さん、ちょっと顔見知りではあるがそれほど深いお付き合いではないという状況から、雑談ができる、立ち話ができる、音楽をやっていない時に廊下や周辺で出会っても少しお話ができる、知り合いいついてるよーという顔と顔の分かる関係になられたかなというのが一番大きな印象です。ちょうどその辺りでしたか、関西の方で大きな地震があったのですが、やはりその後、皆さんがすごく知り合い同士で良かったというような話をされていましたし、とても絆ができたのだなと感じておりました。

それともう一つ、音楽のプログラムの形態が少し変わってしまっていて、とても即興的なプログラムでしたので、そのような体験というのはやはり珍しい体験だったので、皆さん、初めは何をしたらよいのかという不安そうな感じがあったのですが、数回、回を重ねていくうちにそれにすっかり慣れて、色々な楽器をやってみようというような、何をやるのだろうという不安げな様子はなくなって、どんどん積極的になられたという感じが見受けられました。

杉山:

なるほど。一つお尋ねしたいのですが、繰り返し行なっていっていいということ、やはり、今、お話があった通りマンチェスター・カメラータのミュージック・イン・マインドのプログラムであったり、お茶の間オーケストラであったり、わりと即興的ですね。何か皆が用意して、ミュージシャンがここにきて「はい、じゃあ皆さん、これを一緒に歌いましょう」とか「私の真似してください」といったような感じではなくて、その日の皆さんの気分と手に持っている楽器で、今ここに音楽を皆で紡ぎましょうというスタイルが、やはり最初は戸惑いもあったということなのですが、こういった活動を繰り返し行うその意味や意義というのはどのようにお感じに…

名倉:

私も繰り返し行くとどうなるのか、このような即興的なプログラムにどのような影響があるのかと興味を持って見させていただいたのですが、やはり4回目5回目になると、個々が参加しているというような状況から、何か隣同士、あまり言葉はないプログラムなのですが、やはりちょっと会話したり、アイコンタクトが増えたり、少し笑顔が増えたり、「この楽器どう」と隣の方に渡したり、そういう横の繋がりができてこられているのだなという、自然な、緊張感よりも和やかな感じ、雰囲気を感じました。

杉山:

やはりそこで紡がれる音楽だけではなく、体験だけではなく、人と人の繋がりが積み重なっていくごとに深まっていくということですね。名倉さんは普段、施設側の運営や経営も携わっていらっしゃるのですが、そのいわゆる一運営者として、こういったマンチェスター・カメラータが行なっている活動や日本センチュリー響や豊中の文化芸術センターが行なっているような、地域に踏み入った音楽プログラムが特に良いなと思うことなどありましたら、音楽家のことでも構いませんし、メソッドのことでも構いませんし、何かあれば…。

名倉:

まず今回、一番インパクトが大きかったのが、プロのオーケストラのメンバーがチームとして入っているということで、やはり楽器への憧れやオーケストラそのものに対する憧れというのを皆さんお持ちですし、私もあるのですが、そういうところでまず喜びや「すごいな」という、シンプルにそういう思いがありました。実際に来ていただいて、皆さんがすぐに鳴らせるような小物の楽器なども扱うのですが、やはりプロのオーケストラの方がご自分の楽器

を鳴らしてくださった時に出る音、奏でられる音というものに皆さん、やはりすごく集中されるというか、そのような瞬間がたくさんあって、やはり本物はすごいなという感じがいたしました。やはり一般的なものではないので、良い意味で良い刺激だなと感じておりました。そして、出来上がった音楽を届けるという普段のオーケストラの方の活動ではなくて、一緒に作り上げていく、一緒に作ってもらっているという、そういう過程から一緒に共有して楽しんでいるというところも良いと思いましたし、少し角度が違いますが私が個人的に興味があるのは、カメラータの方たちがチームとしてコミュニティ・プログラムを行なっていて、そこにマネージャーというかマネジメントされる方がきちんといらっしゃるところがすごく魅力的でした。

杉山：

マネージャーがいるということは、施設側の皆さんにとって何かとてもやりやすかったりとか、難しさが減ったり、逆に何か皆さんが良いと思った原因というか、何かエピソードみたいなものはあるのですか。

名倉：

そうですね。打ち合わせなどをしていく中で、やはり音楽家の方があれもこれも全部するのではなくて、スケジュールから、助成金の段取りからすべて色々なことを担っていらっしゃる方が専門にいらっしゃるというのが、とても現場としては羨ましいと感じました。

杉山：

カメラータの場合はプログラムを統括するマネージャーがいて、プロジェクトそのものの現場をマネージするシニア・プロジェクト・マネージャー、今日で言えばリジーと、そしてヘレナというチームで動いているわけですね。日本もなかなかそういったところに行くには大変な道のりかも知れませんが、現状ではコミュニティ・マネージャーというポジションがついたり、アート団体でも専門の職員が少しずつついたりしているので、これからどんどん社会福祉とアートの現場が協働していくには、そういったアート側にもマネージャーというか、コーディネートする専門家がいるというのが非常に強みになっていくのかなと思いました。ありがとうございます。

4-7. 名倉：心の自由を届ける

杉山：

では最後の質問になるのですが、今までも皆さんの施設では非常に積極的に、もう5年ぐらい、こういった地域でプロの音楽家とか芸術家たちと協働されているのですが、これから未来に向かって何か期待していच्छることや、もっとこうなって欲しいと思うようなことがありますか。

名倉：

人生において、高齢になっても、認知症になっても、病気になっても、施設に暮らしていても、どのような状況でも音楽やアートを楽しめるというのは、心の自由とか、そういう意味でとても大切ではないかと日々感じているので、そういう選択ができるような世の中になったら良いと思っています。そのために芸術団体と協働してそのような環境作りがしていけたら良いと思っています。

杉山：

私たちも…なかなか社会福祉に繋がるきっかけとか…ワークショップなどをやらせていただきたいな…なかなかお話しする機会とか…で…知り合いの伝手を何とかというのが…するので、是非、社会福祉団体の皆さんからももっと広く、気軽にと言ったら変ですが、気軽にアート団体に声かけられるような仕組みなども今後出てくると良いのかなとも思いますし、この後、お話をうかがう予定になっている社会福祉協議会と、地域には支援してくださる支援団体の皆さんもいच्छるるので、そういった地域を挙げてネットワークを…けるような仕組みが今後出て…と、よりアートを…ネットワークが構築されて、より良い、生きやすい暮らしや社会が実現していくのかなと今日お話を聞いていて改めて思いました。何か言い残したこととかありますか。大丈夫ですか。

名倉：

今、最後のお話を聞いて、介護の今の現場の中で、なかなか芸術を取り入れるという、その部分の枠がないと思ひまして、制度的なこともあるのですが、やはり今ある制度の中に芸術的な要素がどのように入っていけるかというのを駆使して考えることが必要なのかなと思ひました。例えばデイサービスでしたら、機能訓練という加算があるのですが、その部分で介護予防と芸術とをくっつけて取り組んでいくであるとか、認知症のグループホームの方でしたらレクリエーションという分野があるので、そのところに入れていくとか、医療の方では

処方箋という形でアートも取り入れられる場合があるのですが、なかなか今の現状では難しいなと。どうしてもアートはお楽しみというか、生活のプラスのお楽しみというような感じがあるのですが、やはり、介護現場でも元々はナースン・アートという言葉があって、生活に必須なものだなというふうに感じていますので、これからもっともっと文化的な潤いが広がれば良いなと思いました。

杉山：

ありがとうございました。ナースィング・アートという言葉、素敵ですね。今日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

名倉：

はい、ありがとうございます。

映像終了

杉山：

では、ここまで動画でした。名倉さん、ありがとうございました。

そして前日、今日は実は2022年11月29日に収録していて、昨日の夕方28日にこのお話をうかがったのですが、本当に今日の日下先生のレクチャーのことを予見していたかのようなトピックがたくさん出てきたかと思います。まずは日下先生が話していらしたライフサイクルの循環というところで、いかにそのアートというものが生活の中に入っていくことで、人の交流であったり、ご自身のウェルビーイングも含めて、様々なサイクル、循環がどんどんスムーズになっていく、円滑になっていくというようなことが、今、名倉さんからのお話で感じ取れたと思います。特に生活や人生の中にアートがあるという選択ができる、自分の意思で選択できるというのは、本当にこれから私たちが高齢になってきた時に自分の意思で選択できるという機会が少なくなっていく中で、どのようにしたらそこを担保できるかというのは、アート団体にとってもこれから大きな課題になっていくのではないかと思います。

4-8. 川野：千代田区社会福祉協議会がアート活動を積極的に取り入れる理由

杉山:

では続いて、今、名倉さんのお話にも出ていましたが、社会福祉団体の中でもその間を支援して下さる中間支援団体があります。東京側で今回ご協力くださったのが、千代田区社会福祉協議会でした。千代田区社会福祉協議会と東京文化会館では、昨年度から一緒に連携をして音楽ワークショップ、東京文化会館ミュージック・ワークショップを千代田区内で実施させていただいているのですが、今日は千代田区社会福祉協議会の川野圭一さんにご登壇いただいています。

では川野さんにお話をうかがいたいのですが、川野さんは日頃、多世代交流のご担当をなさっていますよね。本当に小学生からご高齢の 60 歳、もっと 70 歳 80 歳 90 歳、かなりアクティブ・シニアの方たちとも一緒に、頻繁に活動をなさっています。ちょうど一年ぐらい前ですか、たまたま川野さんが活動を探していらして、東京文化会館を見つけてお電話をくださって、私は本当に驚いたのを覚えているのですが、それをきっかけに今回の連携と言いますか、カメラタとの協働の中に参画いただきました。川野さんはじめ、千代田区社会福祉協議会がアートやカルチャーを積極的に活用して、本当に多世代、そしてコミュニティ作り、地域の課題をいかに緩和していくかというのを丁寧に丁寧に取り組まれていらっしゃる。今日はそのアート団体や大学、様々なスペシャリストと協働してお取り組みをなさっていることについてお話を幾つかうかがいたいと思っているのですが、その前に、社会福祉協議会というのはいったいどのようなことをやっているのでしょうか。少し簡単にご説明いただけますでしょうか。

川野:

社会福祉協議会は、わかりやすく言うと地域のボランティア拠点になります。地域の人と人を繋いで、公的な制度では対応が難しい生活の困難などを、住民同士、あとは住民と団体と繋いだり、あるいは協働したりしながら、あるいは新たな仕組みを作ったりしながら、誰も取り残さないような地域作りを目指しています。私は多世代交流担当なのですが、多世代交流担当では、世代と、障害の有無や、国籍も含めて、それらの違いを超えて交流の場を開いて住民の繋がりを作ること、そしてそれぞれの世代の持つニーズをリアルでアナログな出会いから学ぶような福祉教育の場としての役割があるのかなと思っています。

杉山:

ありがとうございます。まさに地域文化による SDGs という感じがします。多世代と申しましても、千代田区の場合は東京の本当に中心地にあって、新しいタワーマンションが建ったり、人口が増えたり、それゆえにコミュニティが分断したり、家族の問題があったりと、

様々な課題があるとおうかがいしているのですが、そういった課題を緩和するための取り組みを行なっている千代田区なのですが、非常にアート系の活動が多いように感じています。特にアート系の活動を企画・実践する際に難しいと思われることや、皆さんが今感じていらっしゃる課題や、このようなことが改善されたら活動しやすくなると思っていることがあれば、是非お聞かせいただけますか。

川野：

アートはそれ自体で非言語のメッセージの機能があって、レクリエーションなどに取り入れると障害がある方であっても双方向の交流が生まれる素晴らしいコミュニケーション装置だと感じています。多世代交流事業でもこれまで、音楽に留まらず、絵画、造形、哲学、俳句、シナリオなど幅広いアートに挑戦してきました。一般的なアートのイメージで言うと、プロフェッショナルが舞台の上や詠えられた空間の中で一方的に発信するという印象があって、すごく非日常な雰囲気があると感じています。ビジネスとも深く結びついている印象があって、公的な機関としてはなかなか手が出しづらいという印象があります。またアートそのものが基準や評価から、評価することが難しいというのがあって、組織的な意思決定の公平さをアピールしていく時に、アピールすることが難しいために取り入れることに躊躇してしまうというところはあるかなと感じます。

東京文化会館と一緒にやっているミュージック・ワークショップで言いますと、実際に音楽に参加できるというところが素晴らしくて、非日常的なものに参加者皆でわくわくしながら、アートを身近なものとして感じさせてくれていると思います。ワークショップ・リーダーの皆さんの進行も、世代や性別などの多様性や、障害の有無に配慮していただいて、安心して進行をお任せすることができていると思いますし、そういった人と人をつなぐ手段としてのアートという切り口ですと、担当者レベルでは取り入れやすいという実感があります。

また杉山さんにいつもお世話になっているのですが、こうしたいああしたいというこちらのニーズを一旦引き受けていただいて、インクルーシブな交流の場づくりをお手伝いいただいていることが本当に心強く思っていますし、杉山さんのご紹介でアート・ワークショップも実際に開催することができました。そういった、ニーズを一旦受け止めてコーディネートしてくださる方の存在は本当に重要だと思います。そういう方がいると活動しやすいというふうに思います。

杉山：

ありがとうございます。予想だにしない名前の登場にびっくりしています。

そうですね、アートのワークショップの時で、特に課題に近づいていこうとした場合は、いわゆるその和文和訳ではありませんが、違う領域と違う領域の言語を翻訳して橋渡しができる、共通言語がないところに共通言語を作るとか、共通の価値を作っていくという作業を誰かがどこかでやっていく、いわゆるファシリテーター的な存在が必要なのかなと、特にこのマンチェスター・カメラータとの取り組みと一緒に走ってみても思っているところです。それは先ほど名倉さんのお話にも出たとおりですし、豊中の場合は柿塚さんがその役割を担っていたと思います。ありがとうございます。

4-9. 川野：社会福祉の現場とアート団体が連携する意義、効果、手ごたえ

最後の質問になってしまいますのですが、川野さんは社会福祉側のエキスパートとして現場を作っていって、私たちのような文化施設や実演家団体と連携をして活動を行なっていらっしゃいますが、そういった社会福祉の現場とアートの団体が連携をして、共に手と手を取り合って活動を行う意義やその効果というのはどのようにお感じになっていきますか。例えば手応えなどあったら是非お聞かせください。

川野：

個人的な経験で申し上げますと、子どもの時に地域の音楽会でビゼーのファランドールを演奏したことがあって、エネルギッシュなメロディーの一部になったことをすごく強烈に覚えています。その時は、なくてはならないハーモニーの一部になったような気持ちになって、そこに役割があるということに安心感と誇らしさのようなものを感じました。ここにいていいのだという感じです。多世代交流事業で作りたいと思っている地域の居場所、インクルーシブな居場所というのは、この時の思い出と重なる部分が強いです。言葉にすると「誰もがハーモニーに貢献できる役割を持てる」というところです。先日のミュージック・イン・マインド、とても感動したのですが、参加者の皆様の喜びの表情がとても心に残っています。普段、外出や付き合いがとても減っている社会から孤立しがちな認知症の高齢者が、音楽に参加している時の表情に力強さが見えたと感じています。

多世代交流のところで言いますと、人と人との深い交流を目指しています。それを実現するには、参加者がお客様の立場のままですと難しいという実感があります。アートで表現するという、何かを表現するということは、自分の心を開いていく作業だと思うのですが、そのことに心地良さを感じることができると、自然と歩み寄りが生まれて「自分も相手もかけがえのない存在だ」という実感を湧かせることができるのではないかと実感があります。それを元に主体的な動きが生まれていって、「これをやってみたい、あれをやってみたい」

ということが生まれたり、お隣り同士が仲良くなったりということが実際にあります。安心安全の場所だということが、だんだん実感としてわかってくると、子どもが高齢者の手伝いを始めたり、場の中であったり、泣いている子どもは近くの大人があやしはじめたり、「子どもができた」というと皆で「すごいね」ということを、そういった調和の空間が生まれたりするのです。そういった交流の中で役割があるということが、その場の安心感や愛着に繋がるのではないかと思います。

それで、インクルーシブと言うのですがなかなか本当に難しく、格差が進んでいますし、孤立してしまう方もたくさんいらっしゃるのですが、そういった中でも共に生きて豊かな社会を作っていくためには、個性を魅力に変えてしまうようなアートのマジックを介したコミュニケーションが、人間関係性の新しい作り方を提示してくれるのではないかとことを期待しています。以上です。

杉山：

ありがとうございました。今、一緒にいるパネリストたちからも大きな拍手が飛んでいます。本当に、今、川野さんがお話ししてくださったとおりで、ここにいることが許されると言うか、自分に与える承認と、他者から「ここにいて良いよ」という承認。自分は「私はここにいて良いのだ」と自分自身に与える承認、両方からの承認がないと、やはりそこにいる帰属感であったり、安心感には繋がらないと思うのです。そういった場作りや関係性作りを、アートだからできること、しかしアートだから故に難しくなってしまうこと、例えばそれが成果や言語化しにくいからなかなか評価できなくて、公的な組織としてなかなか導入しづらい、でもそこはもしかすると、その成果や効果を第三者の力や指標を使って言語化したり見せていくことによって、少しずつアートの非言語の良さをを見せていけるのではないかと思います。ありがとうございました。

4-10. 柿塚：継続してきたからこそ生まれた活動と人材の豊かさ

杉山：

ではいよいよ、お待たせしました。柿塚さんにバトンを渡したいと思います。柿塚さんは本当に2016年にカメラータを初めて日本にお呼びになって、そうするとかれこれその前から一緒にカメラータと活動していらっしゃると思うのですが、改めて今年度、日本に5年ぶりに彼らを招聘して、彼らの空気感も含めて体験したわけですが、振り返ってみていかがでしたか。また、今日の登壇者の皆さんのお話を聞いて、何かお思いになられたことがありましたら是非お話いただけますでしょうか。

柿塚：

まず一番最初に2016年に始めまして、2017年もマンチェスター・カメラータと一緒にやりました。2019年までは我々日本人の音楽家だけで、豊中でプロジェクトをやっていたのですが、その後、新型コロナになりまして一時中断していました。音楽家のトレーニングみたいなことはやっていたのですが、しばらく出来ない状況で、この2022年に改めて、初めてコロナ後再開しました。その再開した年にまた皆さんをお招き出来たということなのですが、まず再開するにあたって、先ほどインタビューに出ていただいたオリーブの園の名倉さんの運営している施設ではなくて、そこにはそれまで行っていたのですが、また新たな高齢者の活動をしている施設に行きました。これは豊中市の高齢者の施策をしている部署に相談をしてその施設を選んだのですが、そこではそれまでまったく音楽療法や音楽アクティビティをやったことのない施設で、まさに我々がどういことをやるかということを説明し、実際に見てみないとわからないところもたくさんあるので、今年の7月ぐらいにプログラムを実際に月に一回やっていて、なかなか即興的なプログラムであったり、福祉施設がそれまでやっていたような体操やゲームのようなルールが決まったものとか手順が決まったものではないので戸惑われていたのですが、それを少しずつ「ちょっと僕らに任せてください」というようなコーディネートをして続けていました。そして改めてそこにマンチェスター・カメラータの皆さんと行って、もう一方でオリーブの園の運営している市営住宅には3年ぶり4年ぶりぐらいに久々に行ってそこで再会をしたという、その二つをやったのです。

まず、今回久々にやるにあたって、前と同じことをするというのではなくて、何か、今までしばらく会えなかったけれども、今までそれぞれが積み上げてきたものを交換したり、その上に新しいものを作っていきたいということで色々趣向を凝らしまして、例えば音楽家を今までは日本センチュリー交響楽団のメンバーだけでやっていたのですが、たまたまその主催がオーケストラから地元のホールに移ったのです。地元の市立文化芸術センターが主催して、そこに楽団が協力するという形になりましたので、楽団以外にそのホールに登録されているアーティストや、こういう音楽ワークショップをやりたいというゲストのアーティストまで門戸を開いて皆さんと一緒にやったというのはとても大きくて、やはり何か物事をやろうと思う時に自分たちのメンバーを育成する、あるいは一緒にやるということはすごく大事なのですが、やはりそこに同じ音楽家であっても色々なバックグラウンドも違えば、楽器も違えば、得意なことも違う人が集まることで、とてもそのプログラムが充実するのではないかとということですぐにやりました。そこにさらに改めてマンチェスター・カメラータの皆さんがやってきたということに、とても活動に幅ができて人材の層が厚くなったという気がします。

それともう一つは、その新しく始めた施設が、なんと我々が行くと言った日に、たまたまそ

の施設でやっている乳幼児とお母さんのクラスをやっているのだから「その人たちと一緒にできませんか」という話がありまして、これは結構なかなかの、しかもそこに来る高齢者はわりと元気な方が多いので、元気な高齢者と赤ちゃんとお母さんというのはすごく「初めまして」でやるには難しいのですが、経験がある程度ありますので、少し皆さんにお話をして、せっかくお話をいただいたのでやってみましょうと、そこからまた新しいプログラムが広がるかも知れないということで、日本人側もマンチェスターの方も少し試行錯誤みたいところはあったのですが、それが結果すごく楽しいプログラムになって、やはりずっと積み重ねている意味というのがあったなと思います。そして音楽家の方もやはり最初に、アミーナやナオミが言っていましたが、すごく久々だけれどもちゃんと自信を持って自分たちの道を切り拓いているというところがとても見えましたし、トレーニングもかなり、1 日目の朝にトレーニングをして、1 日目の午後にオリーブの園へ行って、2 日目の朝にその高齢者と子どもたちのプログラムもやって、その後、東京に夜移動するまでの間、午後はずっとまた振り返りをしながらトレーニングをしたのですが、そのトレーニングの中でも、やる内容がより具体的であったり、音楽家から出てくる質問もすごく実践を踏まえた上で、「何か教えてください」ではなくて「私はこう思ったんだけどどうだろう」とか、「この時にこういうふうにやってみただけどう思うか」とか、「あなたならどうするか」のようなエクスチェンジが起こってとても良かったと思います。

杉山：

なるほど。実際に積み重ねていらしたからこそできること、例えば今までは高齢者の方だけだった取り組みが、今回は多世代のところにチャックできたとか、本当に一回一回の実践を丁寧に紡がれてきたからこそ今回の11月の取り組みができたという印象を私も受けました。

4-11. 柿塚：持続可能な活動にしていくために

杉山：

特に、柿塚さんにあえておうかがいしたいのですが、やはり初めて日本にカメラータを招聘なさった時も、このような活動をアート団体が社会福祉の現場と協力してやっていく意味とか、サステナブルに活動していくという意味で、例えば8月の時に柿塚さんがモデレーターしてくださいましたが、やはり社会的な仕組みとか組織的な仕組み、それから音楽家の皆さんなど人材的なプールができるか、関わってくれる人がちゃんと育てているのか、そこもかなり目配せをしながら5年間活動を続けられてきたと思います。また、意識的に様々なセクターと色々な人たちをネットワークを繋げて活動もなさっているというふうに私は印象を受

けているのですが、この辺りについていかがですか。

柿塚：

福祉の側からの視点というのは、今、川野さんや名倉さんが教えていただいたので、あえて芸術団体や劇場という意味で言いますが、やはり先ほど日下先生の話にあったように、創造性やイノベーションみたいなことはまさにアートやアーティストの仕事なのに、いやもするとやはりオーケストラのような古典的な実演団体や、そういうものをやっているホールというのはすごくそこから離れてしまったり、当然努力はするし、創造はするのだけれども、その範囲がどんどん狭くなっていくというか、極端に専門化してしまうということがあると思うのです。しかし、やはり意図的に普段自分たちが何もしなければ繋がれない人たちと繋がることで、そのまさに芸術団体、劇場や、芸術活動そのものが、よりフレキシブルになっていく、新しいものになっていくということがありますし、そういうことというのは、メインのコンサートがあったり、メインの劇場でのパフォーマンスがあったりした余白や様子見でやることではなくて、まさにこれが芸術やアート表現というもののコアになる部分だと思うのです。それを改めて音楽家として、音楽団体として、劇場として取り戻すというか、思い出すというか、そのためにまずこのプログラムというのは重要だと私は思っています。そしてそのためには、やはり何と言ってもまずは協力してくれる音楽家をどのようにして増やすか。自分たちの登録しているメンバーを育成するということもそうですし、先ほど言ったように、外から来るアーティストと組み合わせをしてみてそれぞれの良さを生かす、もしかしたらそこに音楽療法士の人が入るかも知れないし、作曲家が入るかも知れないし、東京文化会館が育成したような素晴らしいワークショップ・リーダーたちと組むということもできると思います。

そして日本の場合は、かなり公立の劇場、プライベートな劇場もそうですが、劇場に劇場法という法律ができて、かなりアートセクターのプロバイダと言うか、地域のアートのプロバイダとして役割が期待されていますから、やはり劇場というのがそれぞれの地域の特性を生かしてそういう活動をコアにやっていく。そうすると少しずつ、その自治体であるとか、社会福祉法人であるとか、NPO などの人たちと広げていって実績を作りながら、少しでもその仕組み、もっと皆さんにこういう活動が広がるような、財政的な裏打ちも含めて、積み上げていければ良いかなと思います。しかし、私はアートセクターの方がこれをコアだと思って取り組むということが最初にくるべきかなと思います。

杉山：

ありがとうございます。本当に、私たち、東京文化会館も公立文化施設として東京都全体に皆さんにアートをお届けするというのが大きなミッションになっている団体、施設なのです。

が、その中で、どのようにしたらより多くの方にアクセスしていただいて、より多くの方に表現の主体にもなっていただけるかというのは、本当にこれからの取り組みの課題の大きな重点事項の一つでもあります。ありがとうございました。

4-12. ヘレナ、ナオミ、アミーナ：連携のその先—共感を呼ぶアート・フォームへ

ここまでずっとカメラータの皆さん、日本の関係者の方たちの話を聞いていただいたのですが、何かひと言ずつコメントやフィードバックがありましたらお願いします。

ヘレナ：

一つ、今回の日本訪問で私は何でもかんでも書き取るようになりました。考えを整理するために書き取っています。そして書き取ったことはすべて覚えておきたいことなのです。なぜこれが私たちにとって大事なのか。なぜ共有をするのか、連携をするのか。それで幾つか心に残ったことがあります。何人かの方がおっしゃっていましたが、連携でチャンスも広がると。また私たちのやり方、学び方の可能性も広がるし、そして知識、経験も交流する場になるし、そしてそれぞれの人の専門分野を尊重してやっていくことができます。そしてアートのプログラムはこのような形で提供する場も広げられることになると思います。私個人的に、私は現場に出てやっている立場ではありません。音楽家のチームではありません。しかし橋渡し役ができるかなと思います。アートとカルチャー、そしてヘルスとソーシャルケアの間を繋いでこうしたプログラムができるようにする立場ではないかと思います。何か共通の土台を築いていく立場ではないかと思います。それをしっかり心に刻み付けるのが大切かなと思いました。

私が他の話を言う前に、アミーナさん、ナオミさん、何かありますか。

ナオミ：

私もたくさんのことを書き留めました。ちょっと整理がつかなくなっているので、先にどうぞ。

ヘレナ：

大文字で書いていたことがあるのですが、ポテンシャルという言葉です。たくさんの方がここから生まれるポテンシャルがあるのではないかと思います。学びのポテンシャル、成長

のポテンシャル、そして発展のポテンシャルがあると思います。学びということ言えば、私たちマンチェスター・カメラータがもっと皆さんがやっていること、日本でやっていることから学ぶ可能性もあります。またそのプライオリティについても知る、ちょっと上手く表現できないのですが、なぜこれをやりたいのか、なぜ今やりたいのか、今、取り組んでいる人たちと、そのプライオリティです。全部ようやくはまり込んできているように思います。クリエイティブな戦略、東京において、またそれが他のアート組織にも広がっていていると。アート、そして文化、ヘリテージといった分野で、そういうリンクが繋がっているところも素晴らしいかと思っています。また、ちょっとメモがわからなくなりましたが、その成長のチャンス、成長の機会がプログラムの中にもあるかと思っています。その他のアート文化財団、団体などを繋ぐことで、他のアートと音楽をどうやって結びつけるのか、そしてたくさんの人たちを引きつけて、もしかしたらもっと繋がりがやすい、もっと共感を呼ぶようなアート・フォームへとその人たちを繋いでいくのか。話せることはたくさんあると思いますが、とりあえず。アミーナさんとナオミさんの時間を取り上げたくありませんので。しかし、チャンスはたくさん開かれているように思います。今、この場で留まるのではなく、もっと先を続けていくことができるのではないかと思います。そしてサポートを得られるということ、たくさんの人からサポートを得られる、皆で実現しようとしているというところも良いことだと思います。

ナオミ：

前進させるという点で言えば、非常に興味深いことを今回の訪問で学びました。私は多世代間のワークショップというのを経験したことがありません。お母さんや赤ちゃんと一緒にやったもの以外はありませんでした。ずっとやりたいと思っていたことでした。イギリスではそういうチャンスが、今、ないのです。コロナのせいなのですが。ですので、こういうグループを一緒に場所に集めることができませんでした。コロナの前には始めようとしていたことだったのです。しかし参加するチャンスをいただいて、たくさんのことを学びました。自分の言語ではない言語でそれができたというのは、やはり音楽の力があつたからこそではないかと思っています。言葉なくしても会話をすることができたと思います。

また、これから先、発展、展開させていきたいものとしては、今回はかなり機能がちゃんと保たれている人が多かったと思います。認知症はまだ発症したばかりとか、少し進んだだけという人でした。しかし、もっと症状が進んでしまった人たちとも取り組むチャンスがあるかと思っています。それもやっていくことができるのではないかと、色々スキルを身につけた上でそういう人との取り組みもできるのではないかと思います。

アミーナさんから付け足してもらいたいと思うのですが。

アミーナ:

ナオミさんが言ったとおり、これから先、私たちが得たそのトレーニング、そして皆さんとの繋がりがあるので、やはり症状が進んだ認知症の人との取り組みではないかと思います。これまで色々なレベルの人たちと会って参りましたが、ニーズも違う。音楽に対するニーズもクリエイティビティに対するニーズも、社会的なニーズも違うと思います。セッションをどう構築するかも変わってきます。その認知症の状態によってそれは変わってくると思います。それから音楽のスキルとして私たちが皆さんにトレーニングを提供して、色々アイデアを交換して参りましたが、それがもっと洗練されていくと思います。もっと病気が進むにしたがって、それが洗練されてくると思います。これは大変プラスになると思いますので、そういう方向で今度は取り組んでみるのが良いかなと思います。もしかしたらその病院に行くとか、病棟に行くとか、特定の、物理的、身体的には音楽に今までのような方たちとは違った形でしか参加できない人もいますかと思いますが、しかし、私たちはスキルを使って、私たちが理解している即興がどう使えるのか、認知症の人を相手にどう使っていくのか、その辺りをもっと洗練させていくことができればと思います。

本日は多くの方から色々なお話をうかがえてとても嬉しく思っております。特に小川さん、そして名倉さんとの動画の内容、お二人の言葉がとても参考になりました。本当に共有をありがとうございました。今で思い出したのですが、私たちにとっては是非とも皆さんから学びたい、もっと学ばせてくださいということを今後ラーニングする機会がありましたらお願いしたいところです。英国と日本では文化的な違いがあります。以前の来日と比べて、今回よりそれを感じ取ったという私の経験ですので、是非我々が提供するトレーニングというものは、皆さんが求めているニーズを満たしているということ、皆さんの文脈の中で、本当にニーズを満たしているということをやりたいと思っております。当たり前のようなことですが、是非ともそれをさせていただければと思います。

杉山:

ありがとうございます。2016年、2017年の時は、私も別の組織の一人として関わらせていただいていたのですが、本当に日本側が皆さんから学ぶぞと、すごく気迫があったように思っています。今回の場合は、もちろんそれを学んだ人たちが実践を続けてきて、今回協働したというのもありますし、あとはなんとなく日本で認知症で音楽療法でやってきた方たち、実際に自分の経験がある方たち、ゼロベースでない方たちがやはり受講生や参加して下さった方に多かったので、ご自身の手法や方法論と比較しながら、これから自分のやっていることをより良くしようという観点で受けられている方が多かったと思っています。ですので、相互に、お互いが一個人として学び合いの場にこの機会がなったのであれば、本当に嬉

しく思います。ありがとうございました。

4-13. 日下：対面の強みを、より多くの人が関われる仕組みを引き出す

最後に、今日せっかく日下先生にずっとご参加いただいていますので、クリエイティブ・エイジングの視点から最初、基調講演いただきました。約1時間10分ぐらいのこの皆さんのそれぞれのディスカッションやご発言をうかがって、先生の方から改めてコメントいただけたら嬉しいです。

日下：

この1時間のディスカッション、すごく興味深くお聞きしました。驚いてお聞きしていたことが一つあって、私は2018年にマンチェスターにお伺いして、ナオミさんやアミーナさんたちと一緒に音楽のワークショップに参加させていただきました。その時に初めてそういう音楽の、ミュージック・イン・マインドを見させていただいて、今回また改めて豊中でされているのをビデオで拝見したのですが、変わらないというか、すぐにまた同じような場を作れてしまうということが凄いなと思ったのです。さらに、それがまた形を変えて多世代でも展開しているというところが、時間や場所を超えて繋がれているような感じがして凄いと思いました。

その一つとしては、やはりオンラインでこうやって私たちが話し合えたり、今日でもこれだけたくさんの人たちで意見を交換できることが、今、すごくしやすくなっています。ですからこれからのことを考えると、物理的に一つの場所に集まらないとできないことが何なのかとか、例えばトレーニングとかでも、今言ったような文化的な違いを理解し合ってニーズを満たし合うといったところというのは、もしかしたら集まらなくても結構できたりするのもかも知れないので、そういった物理的に会わないといけないことと会わなくてもできることを上手く整理すると、こういった音楽プログラムをより良くしていくためにもっと私たちもクリエイティビティを発揮できるのではないかと考えています。そういう色々なチャンネルを使いながら、色々な人がたくさん入っていけるような仕組みを作るということが、今、ここに集まっている私たちの課題ではないかなというふうにお聞きしました。

その他にもいっぱい言いたいことがあるのですが、多分、私がしゃべるより皆さんが色々考えていらっしゃることを言っていた方が視聴者の方にも良いと思うので、私はここまでにしておきます。またこういった集まりに是非参加させていただいて、一緒にディスカッションさせていただきたいと思います。本当に今日は素晴らしいディスカッションありがとうございました。

杉山:

日下先生、ありがとうございました。

5. クロージング

杉山:

本当に皆さん、あっという間に約 2 時間ぐらい経っているのですが、ありがとうございました。最後に、今日どうしても今言っておきたいという方、何かひと言言いたいという方がいらっしゃいましたらどうぞ。大丈夫ですか。アミーナどうぞ。

アミーナ:

はい、ひと言だけです。我々英国側から代表しまして、皆さんにお礼を申し上げたいと思います。日本に行かせていただくチャンスなど、我々にとってとても豊かな旅を皆さんとさせていただいております。ありがとうございます。

杉山:

ありがとうございます。

本当に、今日、皆さん、ありがとうございました。ここまで一緒に見てきてくださっている皆さんも、画面の向こうの皆さんもありがとうございました。

この 8 月から 11 月にかけて行なった一連のプログラムは、文化庁やブリティッシュ・カウンシル、そして笹川財団の助成によって実現しました。ありがとうございました。また各地域の市役所や区役所、介護福祉部署、社会福祉協議会、そして地域包括支援センターの皆様にも多大なるご支援をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

私たち、今、色々とお話をしてきましたが、それぞれの立場から皆さんの生活が少しでも良くなったらよいな、自分が歳を取った時にこんな社会だったらよいなというような思いを抱いて活動していると思います。私自身もこの事業を、この 3 ヶ月、準備期間を含めるともう 2 年ぐらいやっているわけですが、この事業を通じて、高齢者をめぐる活動に取り組もうと

思った時に、どれほど幅広いセクターの人たちとお会いして粘り強い対話をしていかなければいけないのか、そして継続的に積み重ねていく必要があるのかということを改めて学びました。それまで本当に接点がまったくなくても、日頃異なるフィールドで専門領域を持って活動しているプロフェッショナルの人たちと一つのビジョンを共有すれば、あっという間に共通言語が生まれてしまうという瞬間もたくさんありました。本当にそれは不思議なマジックで、それがわかったら少しの難しさや困難さも一緒に乗り越えようという連帯感とか、何かチームワークが組織を越えて生まれるというような場面も幾つもありました。少し難しいなと思っても、自分たちだけでは絶対にこれは辿り着けないというようなことでも、ソーシャル・グッドに向けて、例えばそれがクリエイティブ・エイジングであったり、認知症であったり、孤立だったり、色々あると思いますが、ソーシャル・グッドに向けた活動を、少し視野を広げて、勇気を持って相談しにいってみれば、領域を越えた仲間が見つかるものだなと今回の経験を通じて学びました。それぞれのプロフェッショナルであること、その専門性がきちんと確立されているということがとても大切だというのは、あえてここで私が強調する必要もないのですが、そのお互いが専門性を持ち寄って手を取り合うこと、少し越境し合うこと、そうすることでお互いやお互いの組織の中でも多様性のある活動が生まれて、ひいてはそれが多様性のある社会への一歩になるのだなと、今、感じています。同時に私たちは音楽の専門家でもありますので、音楽がいかに普遍的なものなのか、言語や文化、それも聴覚特性や認知特性すら越境してしまう力があること、人が人らしくいるためのコミュニケーション・ツールであること、表現方法であることというのを確信することもできました。

皆さん、本当にありがとうございました。これからもこれで終わりではなく、ますます連携の輪を広げていけたらと思っています。

東京文化会館では、これからも様々な領域や団体の方々と協働し、コンビビアルな社会の実現、あらゆる人が芸術文化を通じてウェルビーイングを得られる社会を提案できるように尽力してまいります。

今日は長い時間ありがとうございました。登壇者の皆さまもありがとうございました。またお会いしましょう。